

## bu/o+名詞型における名詞の省略可能性について

— 文脈指示用法を中心に —

バルプナル、メティン\*

mbalpinar@mehmetakif.edu.tr

キーワード： トルコ語 指示詞 文脈指示用法 管理可能な領域 省略可能性

### 要旨

本稿では、バルプナル(2011)で十分に述べるができなかったトルコ語指示詞の文脈指示用法 bu/o+名詞型における名詞の省略可能性(統語的削除の可能性)について詳しく検討し、文脈指示用法 bu/o(+Ø)型の持つ以下の特性について論じる。

- (i) 同一発話文脈が与えられた場合、bu+名詞型と bu(+Ø)型の交替において bu+名詞型の存在は bu(+Ø)型の存在の必要条件であり、従って bu(+Ø)型は全て bu+名詞型の省略形であると考えられ、その意味で bu(+Ø)型には(bu+名詞型からの省略を伴わない)名詞句照応形としての用法は存在しない。
- (ii) 一方 bu+名詞型の存在は bu(+Ø)型の存在にとって十分条件ではない。bu+名詞型の存在が bu(+Ø)型の十分条件として機能するためには、bu+名詞型の名詞の指示対象が発話現場に存在することが必要となる。(但し、bu+名詞型自身は、指示対象が発話現場での存在を必要としない。)
- (iii) 同一発話文脈が与えられた場合、o+名詞型と o(+Ø)型の交替において、o+名詞型の存在は o(+Ø)型の存在の必要条件を構成しておらず、従って o(+Ø)型には o+名詞型からの省略を経由しない場合がある。こうした(o+名詞型からの省略を伴わない) o(+Ø)型の存在をバルプナル(2011)で見た名詞句照応形としての oとして位置付けることができる。
- (iv) 一方 o+名詞型の存在は o(+Ø)型の存在にとって十分条件であり、省略を伴う o(+Ø)型には上記(ii)で見た指示対象が発話現場における存在は必要とされない。
- (v) 文脈指示用法の bu / o(+Ø)型が持つ上記(i)~(iv)の特性は (a) 指示詞用法における先行発話文脈への依存度の階層性(省略が引き起こす発話文脈の消失とそれに伴う非文脈指示性への部分的復帰)と (b) 非文脈指示用法が持つ現場性・直示性への依存度の強さの程度によって説明可能である。

### 1. はじめに

現代トルコ語には3系列の指示詞がある(表1)。その中で、bura、böyle、şura、şöyle、ora、öyleは指示詞語幹 bu-、şu-、o- からの派生形であるとされている (Lewis 1967, Gencan 2001, Göksel and Kerslake 2005、林 2008)。

\* Mehmet Akif Ersoy University, Faculty of Arts and Sciences, Department of Eastern Languages and Literatures, Burdur / TURKEY.

表1 トルコ語の指示詞

	モノ・限定	位置	様態
bu系列	bu (これ・この)	bura (ここ)	böyle (このような・このように)
şu系列	şu (これ/それ・この/その)	şura (ここ/そこ)	şöyle (このような・このように/ そのような・そのように)
o系列	o (それ/あれ・その/あの)	ora (そこ/あそこ)	öyle (そのような・そのように/ あのような・あのよう)

[それぞれの指示詞に付けた日本語訳は便宜的なものである。]

(林 2010 : 19)

Bu / böyle、şu / şöyle、o / öyle は名詞(句)の前に置かれてその名詞(句)の意味を限定する指示形容詞として用いられ、bu / bura、şu / şura、o / ora はモノや人、或いは事柄を表す指示代名詞として用いられるとされている(Kornfilt 1997、Ediskun 1999、Gencan 2001、Ergin 2002、Banguoğlu 2004、Göksel and Kerslake 2005)<sup>1</sup>。例えば、下記例(1)から、o mektup の o は指示形容詞、単独用法の o は指示代名詞として機能を果たすということが分かる。

- (1) Bir mektup yaz-ınız ve  
 一 手紙 書く-命令形 (2人称複数) そして  
 {o mektub-u / on-u} müdürbey-e ilet-iniz.  
 その 手紙-対格 / それ-対格 部長-与格 渡す-命令形 (2人称複数)  
 「手紙を一通書いて下さい。そして、その手紙 / それを部長に渡して下さい。」  
 (Hayasi 2004 : 61(改変))

本稿では、従来あまり述べられていない文脈指示用法(先行発話文脈において言語テキスト化されている対象を指示する用法<sup>2</sup>)として用いられた bu / o + 名詞(本稿で言う bu / o + 名詞型)における名詞の省略可能性について詳しく検討する(例えば、(1)の用例では o mektup (i.e. o + 名詞)は単独用法の o (i.e. o(+Ø))のかたちで省略可能であることを観察することができる)<sup>3</sup>。特に、(i) 文脈指示用法の bu / o + 名詞型がどのような場合に bu / o(+Ø)型に省略可能であるか、(ii) bu / o(+Ø)型が全て bu / o + 名詞型の省略形であると考えられるか、(iii) bu / o(+Ø)型は、bu / o + 名詞型には見られないどのような特性を持っているか、と言う問題を詳細に

<sup>1</sup> Böyle / şöyle / öyle は名詞を修飾する場合に指示形容詞、動詞を修飾する場合に指示副詞として役割を果たしている。

<sup>2</sup> 発話文脈とは「発話者が発話時点音声又は一定の書記法を用いて表出した(言語)テキスト」のことであり、言語テキスト化とは「先行発話文脈への指示対象(新規)導入」のことである。

<sup>3</sup> 本稿では「省略」を、与えられた発話文脈に関する一定の統語的な削除操作と考えている。例えば、本文例(1)に見られるような単独用法の o (i.e. o(+Ø)型)は[o mektup]のような構造から名詞部分(mektup)が先行文との同一性に基づいて統語的に削除されることによって派生されると考えている。

検討することにする。まず、以下に、トルコ語指示詞に関する筆者の研究を見ていく。

## 2. 筆者によるこれまでの研究<sup>4</sup>

バルプナル(2014)では、トルコ語における非文脈指示用法の指示詞に関して、バルプナル(2010)の「共通の空間」及び「聞き手による認識」の概念のうち「共通の空間」と言う概念では十分に捉えることができないトルコ語指示詞のデータが存在することを指摘し、それらのデータを説明するためには「話し手の空間」と言う概念が有効であり、**bu** 及び **şu** は「話し手の空間」の対象を、**o** は非「話し手の空間」の対象を指示するのに用いられることを論じた。又、**bu** は「聞き手による認識」がある場合に(i.e. 聞き手が対象の存在に気付いている場合)に、**şu** は「聞き手による認識」がない場合に用いられ、一方 **o** は「聞き手による認識」がある(表2の **o**<sub>1</sub> の場合)か否か(表2の **o**<sub>2</sub> の場合)を問わず用いられることを見た。更に、**şu** に見られる指示対象に対する話し手の側が指示対象に対して持つ心理的共感性/共有性の含意は「話し手の空間」の特性の一つである「指差し」と言う直示的な指示行為から導き出される帰結の一つであることを論じた。

表2 現代トルコ語における非文脈指示用法の指示詞の体系

	話し手の空間	+	—
聞き手による認識			
+		<b>bu</b> ①	<b>o</b> <sub>1</sub> ③
—		<b>şu</b> ②	<b>o</b> <sub>2</sub> ④

(バルプナル 2014 : 38)

バルプナル(2012)では、指示詞の用法を文脈指示用法と非文脈指示用法とに分けて考える必要があることについて述べ、文脈指示用法のトルコ語指示詞の用法を分析する上で、従来言われてきた、指示対象が話し手に近いか遠いかと言う観点ではなく、「指示対象が話し手にとって管理可能な領域(発話の場所・時間において話し手の主体的な活動を妨げないと話し手が判断した領域)に存在するか否か」と言う観点が最も重要な役割を果たしていると言うことを詳細に論じ、「管理可能な領域(発話の場所・時間において話し手(発話者)の主体的な活動を妨げないと話し手が判断した領域)」の概念が、「現場指示性」に強く依存する概念ではないことから、文脈指示用法においては現場・非現場の区別は本質的な役割を果たしていないことを論じた。又、**bu**、**o** の現場指示の文脈指示用法の場合と同様に、非現場指示の文脈指示用法においても「管理可能な領域」の概念が有効であると言うことを述べ、文脈指示用法においては、現場・非現場指示を問わず、**bu** は「管理可能な領域」にあると話し手が判断した対象を、**o** は

<sup>4</sup> 本節では、便宜上バルプナル(2011、2012、2014)の研究をバルプナル(2014)、バルプナル(2012)、バルプナル(2011)の順で見えていくことにする。

「管理可能な領域」にないと話し手が判断した対象を指示するのに用いられると言うことを論じ、この場合も現場指示・非現場指示と言う区分けはトルコ語文脈用法指示詞の本質的区分を反映するものでないことを指摘した。

バルプナル(2011)では、バルプナル(2012)で検討した、文脈指示用法のbu、oの分布を決定する「管理可能な領域」と言う概念では十分に説明することができない現象がトルコ語指示詞の用法には存在することを指摘し、それらの現象を説明する上で「先行発話文脈中の名詞と同一、又は類似の名詞が繰り返し用いられているか否か」と言う統語的観点が必要な役割を果たしていることを論じた(図1参照)。その結果、同一名詞や類似名詞の繰り返しを伴っている場合に用いられるbu、oには (a) bu/o+名詞は単独用法のbu/o(本稿で言う省略形のbu/o(+Ø)型)に書き換え可能であると言うこと、(b) bu/o+名詞と単独用法のbu/oはいずれもその背後に管理可能性の条件が働いていると言うこと、(c) 従って単独用法のbu/oも文脈指示用法の一種であり、非照応文脈指示用法のbu/o+名詞の省略形と考えることができると言うことがわかった。一方、同一名詞や類似名詞の繰り返しを伴わない場合に用いられるbu、oには次のような特徴があることが分かった。(i) bu、oはいずれも文を先行詞とする「文照応形」としての用法を持つ、(ii) 文照応形のoは開放文を指示し、文照応形のbuは非開放文を指示する<sup>5</sup>。又、「文脈指示用法」対「非文脈指示用法」と言う区分けに加え、文脈指示用法をさらに非照応用法と照応用法とに分けて考える必要があることについて述べた。更に文脈指示用法のoには、「文照応形」の他に「名詞句照応形」の用法も存在すると言うことを指摘し、oの持っているそうした特徴も又、「oは開放文を先行詞とする文照応形である」とする(ii)の特徴から導き出すことのできる帰結の一つであると言うことについて論じた。

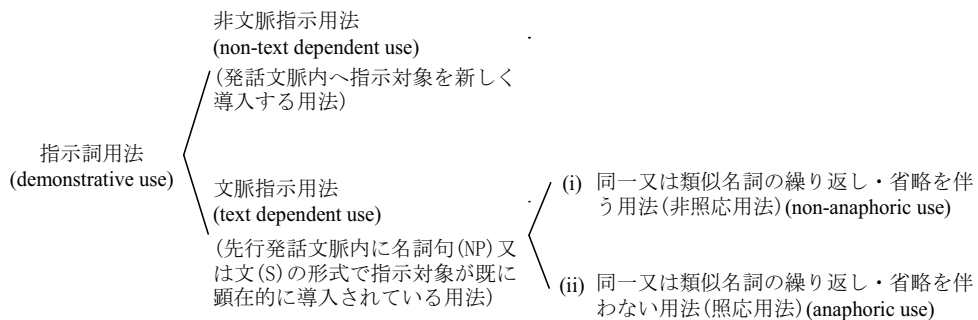


図1 トルコ語指示詞における指示詞用法の分類<sup>6</sup>

(バルプナル 2011 : 96)

<sup>5</sup> 開放文とは、統語形式的な観点から見た場合、「文の統語的構成素の一部が何らかの理由で欠如している文」のことである。この概念は又、意味論的な観点から、「与えられた文の真偽値が意味構造上決定することができない文」とであると定義することもできる。

<sup>6</sup> 図1に示した用法のうち、トルコ語指示詞の非文脈指示用法はバルプナル(2014)、非照応文脈指示用法はバルプナル(2012)、そして照応文脈指示用法はバルプナル(2011)において、それぞれ論じられた。

### 3. bu+名詞型と bu(+Ø)型

本節では、文脈指示用法として用いられた bu+名詞型における名詞の省略可能性について検討する。データの分析に当たって、同一発話文脈が与えられた場合に、(i) bu+名詞型を用いることができるか否か、(ii) (bu+名詞型の省略形である) bu(+Ø)型を用いることができるか否かと言う観点から、(i)と(ii)の組み合わせを以下の4つの場合に分けて考える。

- ① bu+名詞型が使用不可能で、bu(+Ø)型が使用可能である場合
  - ② bu+名詞型が使用可能で、bu(+Ø)型も使用可能である場合
  - ③ bu+名詞型が使用可能で、bu(+Ø)型が使用不可能である場合
  - ④ bu+名詞型が使用不可能で、bu(+Ø)型も使用不可能である場合
- (①のケースに相当するデータなし、②は用例(2)-(2)'及び(3)-(3)'に、③は用例(4)-(4)'及び(5)-(5)'、(2)'-(3)''に、④は用例(6)に相当する)。

同一発話文脈が与えられた場合に、bu+名詞型と bu(+Ø)型がお互いに交換可能であるか否かと言う観点から見た場合、上で見たように①を可能な組み合わせの一つとして考えることができる。しかし、実際の言語使用に当たって、この場合に相当する bu+名詞型と bu(+Ø)型の組み合わせが見られるデータは現代トルコ語には存在しないと言わざるを得ない。その理由としては、筆者が知る限りにおいて、bu(+Ø)型が可能な場合、必ず bu+名詞型も可能であることが観察されることを挙げるることができる。言い換えるならば、現代トルコ語においては bu+名詞型の存在は同一発話文脈における bu(+Ø)型使用のための必要条件となっていることが観察されるということである。

次に bu+名詞型が使用可能であり、かつ bu(+Ø)型も使用可能である②の場合に相当するケースを見てみよう。まず、(2)-(3)からご覧いただきたい。

#### (2) (A, B 2人の会話)

A: Siz-in okumak iste-diğ-iniz kitab-ı  
 あなたたち-属格 読むこと 望む-連体形-2人称複数 本-対格  
 getir-di-m.  
 持ってくる-過去形-1人称単数  
 「あなたの読みたがっていた本を持ってきました(私は)。」

B: Bu kitab-ı ne zaman-a kadar ödünç al-abil-ir-im?  
 この 本-対格 いつ-与格 まで 借りる-可能形-アオリスト-1人称単数  
 「この本をいつまで借りられますか?」

(林 1989: 98 (一部改変)(場面設定は筆者による))

(3) (車の販売員が、車の様々な特徴を客である聞き手に次々と説明している場面である)

Direksiyon-un      üzer-in-de-ki      düğme-yi  
 ハンドル-属格 上-所有(3人称)-位格-修飾形 ボタン-対格  
 gör-üyor      mu-sunuz?      bu      düğme      araba-nın  
 見る-継続形 疑問-2人称複数 この ボタン 車-属格  
 silecek-ler-in-i      çalış-tır-ır.  
 ワイパー-複数形-所有(3人称)-対格 動く-使役形-アオリスト

「ハンドルの上にあるボタンが見えますよね。このボタンは車のワイパーを作動させます。」(バルプナル 2012 : 102)

(2)では話し手BはAが持ってきてくれた本を自分(B)の手に既に受け取った後でbu+名詞型で指示しており、(3)では販売員が車の中で助手席に坐っている聞き手に対して自分の手元にあるボタンをbu+名詞型で指示している。これらのbuは先行発話文脈中に同一名詞が既に導入されている点で言うまでもなくバルプナル(2011)で見た文脈指示用法における非照応用法のbuである(図1参照)。従って、バルプナル(2011、2012)の仮説体系ではこの場合の指示詞の分布は「管理可能な領域(発話の場所・時間において話し手/発話者の主体的な活動を妨げないと話し手が判断した領域)」と言う概念に基づいて決定されることになる。つまり、(2)-(3)では指示対象(本、ボタン)は話し手が主体的に見たり、確認できるところにあるのだから、発話において話し手(発話者)の主体的で自由な認識や活動を妨げないと話し手が判断した領域(本稿で言う「管理可能な領域」)にあると考えることができる。従って、(2)-(3)ではバルプナル(2012)で述べた「管理可能な領域」の原則によりbuが容認されるのである。同様のことは、先行名詞(kitap, düğme)が繰り返されていないと言う点で(2)-(3)とミニマル・ペアを成している次の(2)'-(3)'のbu(+Ø)型でも確認できる。

(2)' ((2)と同じ場面で)

A: Siz-in      okumak      iste-diğ-iniz      kitab-ı  
 あなたたち-属格 読むこと 望む-連体形-2人称複数 本-対格  
 getir-di-m.

持ってくる-過去形-1人称単数

「あなたの読みたがっていた本を持ってきました(私は)。」

B: Bun-u      ne zaman-a      kadar      ödünç al-abil-ir-im.

これ-対格 いつ-与格 まで 借りる-可能形-アオリスト-1人称単数

「これをいつまで借りられますか(私は)」

(3)' ((3)と同じ場面で)

Direksiyon-un üzer-in-de-ki düğme-yi  
 ハンドル-属格 上-所有(3人称)-位格-修飾形 ボタン-対格

gör-üyor mu-sunuz? Bu araba-nın  
 見る-継続形 疑問-2人称複数 これ 車-属格

silecek-ler-in-i çalış-tır-ır.  
 ワイパー-複数形-所有(3人称)-対格 動く-使役形-アオリスト

「ハンドルの上にあるボタンが見えますよね。これは車のワイパーを作動させます。」

(2)'-(3)は場面設定が(2)-(3)と同じである。(2)-(3)と(2)'-(3)'の唯一の違いは、(2)-(3)では先行名詞(kitap, düğme)が後出發話文脈中に繰り返し用いられているのに対し、(2)'-(3)'では同一の名詞が(省略のため)繰り返し用いられていないと言う点である。この場合、(2)-(3)と(2)'-(3)'の場面設定が同じであることを考えるならば、(2)-(3)の場合と同様に、(2)'-(3)'においても指示対象は話し手からみて話し手の「管理可能な領域」にあるものとして見ることができる。この考え方が正しいならば、(2)'-(3)'では(2)-(3)の場合と同じく指示詞 bu が選択されるはずである。実際に、(2)'-(3)'では bu が容認されるのである。以上の考察から我々は、(2)-(3)の bu+名詞型と(2)'-(3)'の bu(+Ø)型が同一の發話文脈で同じ条件(管理可能性条件)に従っていることが分かる。従って、その意味において(2)'-(3)'の bu(+Ø)型は(2)-(3)の bu+名詞型の省略形であると結論付けることができるだろう。

以上、①及び②の観察から、(a) bu(+Ø)型が使用可能な場合は必ず bu+名詞型が使用可能であること、(b) 先行發話文脈中の先行名詞が繰り返されている bu+名詞型と先行名詞が繰り返されていない bu(+Ø)型はいずれもその背後に「管理可能な領域」と言う概念が働いていることを見た。(c) 従って、(2)-(3)とミニマル・ペアを成している(2)'-(3)'の bu(+Ø)型は、(2)-(3)の bu+名詞型の省略形として記述することができる。

次に、③の場合を考えてみよう。次の(4)-(5)の例を見ていただきたい。

(4) Yarın bir mektup yaz-acağ-ım.

明日 一 手紙 書く-未来形-1人称単数

Bu mektub-u müdürbey-e ilet-ir-se-niz

その 手紙-対格 部長-与格 渡す-アオリスト-仮定形-2人称複数  
 sevin-ir-im.

喜ぶ-アオリスト-1人称単数

「明日手紙を一通書きますから、その手紙を部長に渡していただければ嬉しいです。」

(Hayasi 2004 : 61(改変))

- (5) **Bir zaman-lar, hayvan-lar-in mutlu**  
 ある 時-複数形 動物-複数形-属格 幸せに  
**yaşa-dığ-ı bir ülke var-mış.**  
 暮す-連体形-所有(3人称) ある 国 ある-伝聞  
**bu ülke-de hiçbir hayvan birbirin-e düşman değil-miş.**  
 この 国-位格 どの 動物 互い-与格 敵 否定形-伝聞  
 「昔、動物たちが幸せに暮している**国**があったそうだ。この**(その)国**ではどの動物も互いの敵ではなかったそうだ。」(バルブナル 2012 : 110)

(4)-(5)では先行発話文脈中に指示対象が言語表現(mektup、ülke)として導入されており、かつその言語表現が後出の発話文脈の中で繰り返し用いられているので、(4)-(5)の**bu**も(2)-(3)の**bu**と同じく文脈指示用法における非照応用法の**bu**であると考えられる。従ってこの場合も、バルブナル(2011、2012)の仮説体系から言えば、指示詞(**bu**)の分布は「管理可能な領域」と言う概念に基づいて決定されることになる。つまり、(4)では手紙を書くのは話し手自身なので、話し手は自分の主体性のもとに行われる手紙を書くと言う行為に自分の意思を自由に反映させることができる。また、(5)の場合、話し手は物語り作家であり、自分の知識に基づいて動物王国と言う想像上の国を作り出し、その国を指示の対象としている。この場合、話し手は当然その国のキャラクターやストーリー等を自由に自分の主体的な管理下におくことができると考えることができる。その意味で、(4)-(5)の指示対象(手紙、動物王国)は話し手の主体的な創作活動を防げない領域(管理可能な領域)にあると考えることができる。

次に(4)-(5)の先行名詞の繰り返しのない場合を見てみよう。他の条件が同じなら、上の(2)-(3)、(2)-(3)'で見たのと同様に、先行名詞の繰り返しの場合だけではなく、先行名詞の繰り返しのない次の場合((4)-(5)')にも指示詞(**bu**)の分布に関して、「管理可能な領域」と言う概念が働いているだろうと考えることができる。次の(4)-(5)'を見ていただきたい。

- (4)' **Yarın bir mektup yaz-acağ-im.**  
 明日 一 手紙 書く-未来形-1人称単数  
**\*Bun-u müdürbey-e ilet-ir-se-niz**  
**それ**-対格 部長-与格 渡す-アオリスト-仮定形-2人称複数  
**sevin-ir-im.**  
 喜ぶ-アオリスト-1人称単数  
 「明日**手紙**を一通書きますから、**それを**部長に渡していただければ嬉しいです。」



- (5)' Bir zaman-lar, hayvan-lar-ın mutlu  
 ある 時-複数形 動物-複数形-属格 幸せに  
 yaşa-dığ-ı bir ülke var-mış.  
 暮す-連体形-所有(3人称) ある 国 ある-伝聞  
 \*Bura-da hiçbir hayvan birbirin-e düşman değil-miş.  
 ここ-位格 どの 動物 互い-与格 敵 否定形-伝聞  
 「昔、動物たちが幸せに暮している国があったそうだ。そこではどの動物も互いの敵ではなかったそうだ。」

(4)-(5)と(4)'-(5)'を比較してみれば容易に分かるように、(4)'-(5)'では発話文脈中に先行名詞が繰り返し用いられていないだけで発話の状況は(4)-(5)と全く同じであり、指示対象(手紙、動物王国)も等しく先行発話文脈中に導入されていると考えることができる。その意味では(4)'-(5)'も(4)-(5)と同様に文脈指示用法の一種であると考えることができる。そうだとすれば、他の条件が同じならば、(4)'-(5)'でも(4)-(5)の場合と同様に「管理可能性」の条件が働いてbu(+Ø)型の選択が可能になるはずである。しかし実際には、(4)'-(5)'ではbu(+Ø)型が容認されない<sup>7</sup>。

このことから我々はbu+名詞型が使用可能な場合に必ずしもbu(+Ø)型が自動的に使用可能になるのではないことが分かる。言い換えれば、bu+名詞型が常にbu(+Ø)型に省略されるわけではないということである。ではbu+名詞型の省略が阻止されるのはどのような場合なのだろうか？(2)-(3)と(4)-(5)の場合を注意深く観察すると同一の発話文脈が与えられたときにbu+名詞型だけが許されて、bu(+Ø)型が許されないのは、bu+名詞型の名詞の指示対象が発話現場に存在しない(4)'-(5)'のような場合だけであることが分かる。これに対し、bu+名詞型の名詞の指示対象が発話現場に存在する(2)-(3)のような場合、上で見たようにbu(+Ø)型も用いることが可能になる。

最後に、④の場合について考えてみよう。次の用例(6)をご覧ください。

- (6) (トンネルを掘って刑務所から脱走しようとしている場面である。そこでトンネルが急に狭くなり、一つ大きな石に突き当たる。トンネルを掘っている囚人が後ろの囚人に対して)  
 Bir taş var, \*bu taş-ı sökmek lazım.  
 一 石 ある その 石-対格 取り出す 必要  
 「石が一つある。その石 / それを取り出す必要がある。」(Ögüt 2004 : 51(一部改変))

(6)では、指示対象(taş)が先行発話文脈中で言語テキスト化されており、かつその指示対象が同一発話文脈中で再び言及されている。従って、このbuはバルブナル(2011)で見た文脈指示用法における非照応用法のbuであると考えることができる。従って、この場合も「管理可能な

<sup>7</sup> 匿名の査読者のかたから、(5)'ではbundaではなく、buradaとなる理由の説明が必要ではないかとの示唆をいただいた。今後の検討課題としたい。

領域」と言う概念が指示詞(bu / o)分布を決定していると言える。具体的には、(6)では話し手が石を取り出そうと思ってもそれは容易にはできない状況にあるため、この場合、指示対象(石)は話し手の「石を取り出す」と言う主体的で自由な行為活動が及ばない領域にあると考えることができる<sup>8</sup>。換言すれば、(6)では指示対象(石)は話し手の「管理可能な領域」に存在するとは考えることができない。指示対象が話し手の「管理可能な領域」にあるときのみ bu が使用可能であることを考えるならば、(6)の場合指示対象を指示するのに bu が用いられないと予測される。実際に、(6)では bu+名詞型が容認されない。同様のことは、指示対象(taş)が発話文脈中で繰り返されていない次の(6)'についても考えられる。

(6)' (場面設定は(6)の場合と同様)

**Bir taş var, \*bun-u sökmek lazım.**  
 一 石 ある それ-対格 取り出す 必要  
 「石が一つある。それを取り出す必要がある。」

(6)と(6)'の発話状況が同じであることを考えるなら、(6)'においても指示対象は話し手の「管理可能な領域」にないと考えられる。従って、(6)'においても(6)の場合と同様に bu が用いられないと予測される。実際に、(6)'では bu が容認されないのである。

以上、上述①~④の組み合わせの検討から文脈指示用法に用いられた bu+名詞型における名詞の省略可能性に関しては次の点が導き出されると言えるだろう。

- (7) a. ①/②の場合の観察から、bu(+Ø)型が使用可能なときは必ず bu+名詞型が可能になることが分かる。従って、bu+名詞型の分布が bu(+Ø)型の分布の必要条件であると考えられることができる。
- b. ②/③の場合の観察から、bu+名詞型が使用可能な場合必ずしも bu(+Ø)型が自動的に使用可能になるのではないということが分かる。従って、bu+名詞型の分布は bu(+Ø)型の分布の十分条件ではないと考え得る。
- c. 上記特徴 a より bu(+Ø)型には必ず対応する bu+名詞型が存在するのだから、全ての bu(+Ø)型は bu+名詞型の省略形として記述することができる。従って bu+名詞型には、(本論文で定義する意味での)省略を伴わない名詞句照応用法は存在しないと考えられることができる。
- d. 一方、上記 b より全ての bu+名詞型が bu(+Ø)型と互換性があるわけではないことが

<sup>8</sup> 本文例(6)の場合、指示詞の選択が「管理可能性」の条件に従っていることは次の例と比較すると一層よく分かる。

(i) (母親との外出から帰った子供が、郵便受けの中をのぞいて後にいる母親に対して)

**Bir mektup var, bu mektub-u oku-yabil-ir mi-yim?**  
 一 手紙 ある この 手紙-対格 読む-可能形-アオリスト 疑問-1人称単数

「手紙が一通ある、その手紙を読んでもいい?」

この場合には、本文例(6)の場合とは異なり、指示対象(手紙)が話し手(子供)の管理可能な領域にあることは言うまでもない。

分かる。(2)'-(3)')と(4)'-(5)')の比較から互換が可能なのは bu+名詞型の名詞の指示対象が発話現場に存在するとき(かつ後述するように指示対象を指差して指示するとき)だけであることが分かる。

- e. 従って、c 及び d より bu(+Ø)型の分布は、指示対象が発話現場に存在するときのみ、bu+名詞型から省略で得られると結論付けることができる。
- f. 以上より(非照応)文脈指示用法の bu+名詞型の分布は「管理可能性」の条件にのみ従い(指示対象が発話現場での存在 / 不在と言う)現場性の条件に従わないのに対し、bu(+Ø)型の分布は、「管理可能性」の条件に加えて、現場性の条件にも従うことが分かる。

バルプナル(2012)での考察から、我々は文脈指示用法の指示詞の分布にとって、現場指示・非現場指示と言う現場性の概念は本質的な関連を持たない(irrelevant)概念であることを既に知っている。それでは、同じ(非照応)文脈指示用法であるにもかかわらず、bu+名詞型の分布は予想通り現場性には言及しないのに、何故 bu(+Ø)型の分布だけは現場性の条件に従うのだろうか。言い換えるなら、bu(+Ø)型は「管理可能性」の条件に従い、その意味では典型的な文脈指示用法であるにもかかわらず、何故指示対象の現場性を必要とするのだろうか。ここで手がかりになるのは、文脈指示用法の場合、bu+名詞型は(指示対象がたとえ発話現場に存在している場合でも)必ずしも指差し等の言語外条件(直示的な<deictic>条件)を必要としないが、一方 bu(+Ø)型は(指示対象が発話現場に存在する場合には)義務的に指差し等の直示的な条件を必要とする点である<sup>9</sup>。このことを具体的に(2)と(2)')の発話状況を例にとって見てみよう。(2)と(2)')では話し手Bは話し手Aが持ってきてくれた本を自分(B)の手に受け取ってから発話している場合であることは上で見た通りである。その場合 B は受け取った本を(特に指差し等を伴わなくても) bu kitap と bu+名詞型で指示することができるし、又(必ず指差し等を伴いながら)bu と bu(+Ø)型を用いて指示することができる。一方、A から受け取った本を B が自分(B)の鞆にしまった後に発話すると言う状況では、指差し等を伴わない場合は bu+名詞型(bu kitap)と bu(+Ø)型(bu)のうち前者の方がより適切な指示方法となる。このことは、次の(2)''を見るとよく分かる。

(2)'' (話し手 A は持ってきた本を話し手 B に渡す)

A: Siz-in                      okumak    iste-diğ-iniz                      kitab-1  
 あなたたち-属格 読むこと 望む-連体形-2 人称複数 本-対格  
 getir-di-m.  
 持ってくる-過去形-1 人称単数  
 「あなたの読みたがっていた本を持ってきました(私は)。」

<sup>9</sup> 文脈指示の bu+名詞型が(指示対象が発話現場に存在していても)指差しを必要としないのは、そもそも非文脈指示でも bu+名詞型はそれほど指差しを必要としないことと同じ現象であると思われる。特に(şu と異なり)、(非文脈指示用法の)bu は聞き手が対象に気付いていることを前提としているので、名詞が顕在的に現れている場合(i.e. bu+名詞型の場合)、指示対象の特定のために(şu の場合ほどには)指差しが必要とされないと考えることができよう。

(話し手 B は話し手 A から受け取った本を鞆にしまい、鞆や鞆の中の本を指差す動作を特に伴わないで A に尋ねる場面で)

B: {bu kitab-ı / \*bun-u} ne zaman-a kadar

この本-対格 / これ-対格 いつ-与格 まで

ödünç al-abil-ir-im.

借りる-可能形-アオリスト-1 人称単数

「この本をいつまで借りられますか(私は)。」

(林 1989 : 98 (一部改変) (場面設定は筆者による))

(2)''では、話し手 B が(本が入っている)鞆に手で触れる動作をするか又はその鞆を指差しながら示さなければ、bu(+Ø)型の使用は容認されない。一方、bu kitap (bu+名詞型)を用いた場合には特に指差し等の直示的な指示方法を用いなくても bu kitap だけで指示対象を指示することができる。

文脈指示用法の bu(+Ø)型は非文脈指示用法の bu(+Ø)型の場合と同様に義務的に指差し等の直示的な条件を必要とすることは次の(3)''からも又確認できる。

(3)'' (場面設定は(3)の場合と同様)

Direksiyon-un üzer-in-de-ki düğme-yi

ハンドル-属格 上-所有(3 人称)-位格-修飾形 ボタン-対格

gör-üyor mu-sunuz? {bu düğme / \*?bu} araba-nın

見る-継続形 疑問-2 人称複数 この ボタン / これ 車-属格

silecek-ler-in-i çalış-tır-ır.

ワイパー-複数形-所有(3 人称)-対格 動く-使役形-アオリスト

「ハンドルの上にあるボタンが見えますよね。このボタン / これは車のワイパーを作動させます。」 (バルプナル 2012 : 102)

(3)''は先にみた(3)と場面設定が同じである。但し、(3)の場合と異なり、(3)''では話し手が指示対象の指示に指差しを伴わない場合を想定している。この場合、上で見た(2)''と同じく bu+名詞型の bu düğme は問題なく用いられる。これに対し、指差し等の直示的な指示動作を伴わない bu(+Ø)型の使用は許されないことを観察することができる。

こうした(2)''-(3)''の観察が正しければ、文脈指示用法の bu(+Ø)型はその使用に当たっては指差し等の使用が(何らかの理由で)義務的なので、指示対象が指差しが可能な領域(i.e. 発話現場領域)に存在するときのみ、適切に使用可能になると考えることができる。即ち、指示対象が発話現場に存在しない状況での文脈指示用法の bu(+Ø)型の使用は、(統語論的には bu+名詞型からの復元可能性の条件に基づく削除操作によって、又、意味論的には「管理可能性」の条件によって、生成可能であるが、)指差し等の純粋な言語外の要因(直示的な要因)によって認可されないと考えることができる。

以上をまとめると、指示対象が発話現場に存在しない状況での文脈指示用法の **bu(+Ø)** 型は、復元可能性の条件を満たし、「管理可能性」の条件を満たす限りにおいて、統語論的にも意味論的にも自由に **bu**+名詞型から派生することができるが、実際の言語使用に当たっては指差し等の直示的な言語外の要因によってその使用が制限されていると考えることができる。本節の **bu**+名詞型に用いられる **bu** が文脈指示用法の指示詞であるにもかかわらず(あたかも非文脈指示用法の指示詞のように)こうした純粹に言語外の要因である指差し等の直示(*deixis*)及び現場性の条件に従うこと(i.e. 非文脈指示性を有していること)は、バルブナル(2014)で既に述べたように、そもそも非文脈指示用法の場合において **bu** が **su** と共に「話し手の空間」の指示詞として用いられ、従って定義上指差しを必要とする指示詞であることにその原因を求めることができるだろうと筆者は考えている。

こうした考え方(文脈指示用法の **bu** には非文脈指示用法の **bu** の持つ「話し手の空間性」・現場性が投影されていると考えること)が正しいとするならば、同じ文脈指示用法の **bu**+名詞型には非文脈指示用法の **bu** が本質的に持っている指差し等の直示性・現場性が何故反映されていないのだろうか(i.e. 何故文脈指示用法の **bu**+名詞型は、指示対象が現場に存在しなくても使用可能なのだろうか)。さらには、何故同じ文脈指示用法でありながら、**bu(+Ø)** 型にだけ非文脈指示性(現場性)が投影されるのだろうか。筆者はその鍵は省略と言う仕組み自体に内在していると考えている。いま省略を、与えられた発話文脈に対する一定の削除操作と考えるならば、文脈指示用法 **bu(+Ø)** 型に見られる削除は、文脈指示用法を定義付けている発話文脈の一定の消失を意味すると考えることができ、その意味では、削除操作を義務的に伴う文脈指示用法の **bu(+Ø)** 型は、純粹な非文脈指示用法指示詞 **bu** と純粹な文脈指示用法の指示詞 **bu**+名詞型の間形態として位置付けることができる。このように考えるならば、(先行発話文脈中に指示対象名詞が存在することから考えて)定義上は文脈指示用法に分類される **bu(+Ø)** 型が、実際の使用に当たっては(文脈指示用法の **bu**+名詞型には決して観察されない)非文脈指示性(現場・直示性)を合わせもつのは、文脈指示用法の **bu(+Ø)** 型が(定義上持っている)文脈指示性が、省略によって発生する発話文脈の一部消失のために弱められ、非文脈指示性により近づくことに伴って生じる、**bu(+Ø)** 型の中間的な性格と非文脈指示用法の **bu** が持つ強い現場・直示性への依存度に起因するものであると筆者は考えている。同様に **bu(+Ø)** 型が、(7c)に見るように名詞句照応形としての用法を持たないことも、省略に伴う非文脈指示性への部分的回帰と非文脈指示用法の **bu** が持つ強い現場・直示性への依存によって説明できると考える。

#### 4. o+名詞型と o(+Ø) 型

本節では、文脈指示用法の **o**+名詞型における名詞の省略可能性について検討する。分析に当たって、前節の **bu**+名詞型の場合と同様に、同一発話文脈において(i) **o**+名詞型を用いることができるか否か、(ii) (**o**+名詞型の省略形である) **o(+Ø)** 型を用いることができるか否かと言う観点から、(i)と(ii)の組み合わせを以下の4つの場合に分けて考える。

- ① o+名詞型が使用不可能で、o(+Ø)型が使用可能である場合
  - ② o+名詞型が使用可能で、o(+Ø)型も使用可能である場合
  - ③ o+名詞型が使用可能で、o(+Ø)型が使用不可能である場合
  - ④ o+名詞型が使用不可能で、o(+Ø)型も使用不可能である場合
- (①は用例(8)-(9)に、②は用例(10)-(10)'及び(11)-(11)'に、  
③の場合に相当するデータなし、④は用例(12)に相当する)

まず、①の場合について考えてみよう。次の(8)-(9)の用例を見られたい。

(8) Yarın **bir mektup** yaz-acağ-ım.

明日 一 手紙 書く-未来形-1人称単数

{\*o mektub-u / on-u} müdürbey-e ilet-ir-se-niz

その手紙-対格 / それ-対格 部長-与格 渡す-アオリスト-仮定形-2人称複数  
sevin-ir-im.

喜ぶ-アオリスト-1人称単数

「明日**手紙**を一通書きますから、**その手紙** / **それを**部長に渡していただければ嬉しいで  
す。」 (Hayasi 2004 : 61 (改変))

(9) Ben **bunca zaman-dır ölüm-e**

私 これほど 時間-強調詞 死亡-与格

hazır-dı-m, {\*o ölüm-ü / on-u }

準備ができていく-過去形-1人称単数 **その死**-対格 / **それ**-対格  
beklemek-te-ydi-m.

待つ-位格-過去形-1人称単数

「私はこれほどの間ずっと死を覚悟していたし、\***その死** / **それを**待っていた。」

(Ögüt 2004 : 291)

これらの例では、(8)ではo mektup、(9)ではo ölümが用いられないことから分かるように、o+名詞型を用いることができない発話文脈においてo(+Ø)型はその使用が容認されていることが観察できる。こうした観察から、我々は(8)-(9)のo(+Ø)型はo+名詞型の存在を前提としないことが分かる。言い換えれば、(8)-(9)のo(+Ø)型はo+名詞型の省略形として捉えることができない指示詞用法であると言うことである<sup>10</sup>。その意味で、このo(+Ø)型はバルプナル(2011)で見た同一名詞の繰り返し・省略を伴わない照応用法のoであると考えられる。言葉を変えれば、(8)-(9)の指示詞oがそれぞれ名詞句 mektup(手紙)、ölüm(死)を先行詞

<sup>10</sup> (8)-(9)のo(+Ø)型は文脈指示用法のo+名詞型からの省略を経由しないため、文脈指示用法のo+名詞型の従う「管理可能な領域性の条件」に従う必要がないと考えることができる。本文例(8)でo+名詞型(o mektup)が容認されないのは言うまでもなく、mektupが管理可能な領域に存在するからである。同じ発話状況でo(+Ø)型が使えらる言うことは、(8)のo(+Ø)型は管理可能性の条件に従わない指示詞であると言える。



(10)' (話し手は隣にいる聞き手に対して)

Göz-üm-e                      **bir şey** kaç-tı.  
 目-所有(1人称)-与格    **何か**  入る-過去形  
 Çok      acı-yor...              Bu      mendil-le  
 とても  痛む-継続形    この  ハンカチ-で  
**on-u**                      al-sa-n-a!  
**それ**-対格  取る-仮定形-2人称単数-強調詞  
 「(私の)目に**何か**入った。とても痛い...このハンカチで**それ**を取ってくれ!」

(11)' **Bir mektup** yaz-mız                      ve

一  **手紙**              書く-命令形(2人称複数)    そして  
**on-u**                      müdürbey-e ilet-iniz.  
**それ**-対格  部長-与格  渡す-命令形(2人称複数)  
 「**手紙**を一通書いて下さい。そして、**それ**を部長に渡して下さい。」

(10)'-(11)'は場面設定が(10)-(11)と同じである。(10)-(11)と(10)'-(11)'の唯一の違いは、(10)-(11)ではそれぞれ *o şey*、*o mektup* のように *o*+名詞型が用いられているのに対し、(10)'-(11)'では *o(+Ø)*型が用いられていると言う点である。両者は場面設定が同じであることを考えるなら、(10)-(11)の場合と同様に、(10)'-(11)'においても指示対象は話し手の「管理可能な領域」にないものとして見ることができる。この考え方が正しいならば、上で見た(10)-(11)の場合と同様に、(10)'-(11)'の場合も指示対象を指示するのに *o*が選択されるはずである。実際に、我々の考え通り、(10)'-(11)'では *o*が容認されるのである。

以上の考察から、(10)-(11)と(10)'-(11)'においては、発話文脈中に同一名詞が繰り返されている場合((10)-(11)の場合)にも、同一名詞が繰り返されていない場合((10)'-(11)'の場合)にも、文脈指示用法の指示詞の選択については、同じ条件(管理可能な領域性の条件)が働いていることが分かる。*o*+名詞型((10)-(11))と *o(+Ø)*型((10)'-(11)')が同一の発話環境で、同じ条件に従うことを考えるなら、上記②の組み合わせにおいて *o(+Ø)*型は、*o*+名詞型の省略形として記述することができる。

次に、③及び④の場合を見てみよう。トルコ語指示詞に関する今回のデータの中には③の場合に相当する用例には見当たらなかった。何故ならば(10)-(11)に見る通り、指示対象が発話現場にある場合(10)、および、指示対象が発話現場にない場合(11)のいずれの場合においても、*o*+名詞型と *o(+Ø)*型の交替が可能であり、かつ、指示対象が発話現場に存在する場合としない場合が指示対象の存在様式の全ての場合を尽くしていることを考えるならば、指示対象が管理可能な領域の外にある全ての場合について *o*+名詞型と *o(+Ø)*型の交替が可能であると言うことになり、従って組み合わせ③のようなケースは原理的に存在しないと言える。一方、④の場合に相当する例としては次の(12)が挙げられる。



- (12) A: **şu yumağ-ı ver-ir mi-sin?**  
 その 毛糸玉-対格 与える-アオリスト 疑問-2 人称単数  
 「その毛糸玉を(こちらに)渡してくれる?」
- B: **\*o yumağ-ı / \*on-u mu?**  
 その 毛糸玉-対格/それ-対格 疑問  
 「その毛糸玉 / それか?」 (西岡 2006 : 63-64) (改変)

(12)では、話し手 A は PC ゲームに熱中している話し手 B の背後から呼びかけ、話し手 B の直ぐそばに転がっていった毛糸玉を拾って渡すように頼んでいる。この場合、毛糸玉は定義により話し手 B の管理可能な領域内にあるのだから、話し手 B はその毛糸玉を o+名詞型(o yumak)で指示することができない。又その場合 o(+Ø)型(onu)を用いることもできないことは(12)に見る通りである(言うまでもないことだが、(12)の o(+Ø)型(onu)は o+名詞型の存在を前提にしていないのだから、省略形ではなく名詞句照応形として理解されるべきものである)。

以上、本節における①~④の組み合わせの検討から文脈指示用法の o+名詞型における名詞の省略可能性に関しては次の点が導き出される。

- (13) a. ②/③から、o+名詞型が使用可能なときは必ず o(+Ø)型が使用可能であることが分かる。従って、o+名詞型は o(+Ø)型の十分条件であると考えることができる。
- b. ①/②から、o(+Ø)型が使用可能なとき、必ずしも全ての o+名詞型が使用可能なのではないことが分かる。従って、o+名詞型は o(+Ø)型の必要条件ではないことが分かる。
- c. 上記 a より o+名詞型が存在する場合には、o(+Ø)型はその省略形として記述できることが分かる。
- d. 上記 b より o+名詞型の存在を前提としない o(+Ø)型が存在することが分かる。言い換えるならば、o(+Ø)型には省略から派生されたとは考えることができない場合が存在するということである((8)、(9)、(12)の場合)<sup>11</sup>。

上で見た o+名詞型の省略形として考えることができない o(+Ø)型((8)、(9)、(12)の場合)は、バルプナル(2011)で見た(同一名詞の繰り返し・省略を伴わない)名詞句照応用法としての o と同一のものである(注 11 に述べた通りである)。この o((8)、(9)、(12)の o)は文脈指示用法の o+名詞型からの省略を経由しないのだから、o+名詞型の従う「管理可能性」に従う必要がないこと((8)-(9))は容易に理解できる。しかし、例文(8)、(9)、(12)に見られる名詞句照応

<sup>11</sup> 全ての bu(+Ø)型は bu+名詞型の省略形として考えることができる(7c)のに対し、全ての o(+Ø)型は必ずしも o+名詞型の省略形として考えることができない(13d)。この点において、名詞句を先行要素とする文脈指示用法の o(+Ø)型には明らかに bu(+Ø)型とは異なる分布を示す用法が存在し、この用法がバルプナル(2011)で見た名詞句照応形としての指示詞 o に対応していると考えられる。その意味でバルプナル(2011)の我々の主張の一つである「現代トルコ語指示詞 o は省略を伴わない名詞句照応用法を持つが、bu にはそのような用法は存在しない」という主張の正しさは、本稿で検討している省略現象の分析によっても支持されることが分かる。

形の *o* は全く条件に従わずに自由に用いられるかと言うと実はそうではない。名詞句照応形の *o* は、指示対象が発話現場に存在しない場合((8)-(9)の場合)には使用可能だが、一方指示対象が発話現場に存在する場合((12)の場合)には用いられないことが上で見た(8)-(9)と(12)の例からそれぞれ分かる。

これに対し、省略を伴う *o(+Ø)* 型(i.e. (10)-(11))'で見た *o*+名詞型が同一発話文脈で使用可能な場合の *o(+Ø)* 型は指示対象が発話現場にあっても使用可能である。上で見た(10)'は指示対象が発話現場にある場合の *o(+Ø)* 型であり、(11)'は指示対象が発話現場に存在しない場合の *o(+Ø)* 型の例に相当する。

省略に依存しない(名詞句照応形の)*o* は、指示対象が発話現場に存在しないときにだけその用法が許容され、一方省略を伴う(非照応形の)*o(+Ø)* 型は、そのような現場性に関する制約を持っていないことは、次の(14)の例を見ると一層よく分かる。

(14) (話し手 A が PC ゲームに熱中している話し手 B の背後から呼びかけ、話し手 B の直ぐそばに転がっていった毛糸玉を拾って渡すように頼んでいる場面で)

A: *ʃu yumağ-ı ver-ir mi-sin?*

その 毛糸玉-対格 与える-アオリスト 疑問-2 人称単数

「その毛糸玉を(こちらに)渡してくれる?」

B: {*\*o yumağ-ı / \*on-u*} *mu?*

その毛糸玉-対格/それ-対格 疑問

「その毛糸玉 / それ?」

A: *Evet, {o yumağ-ı / on-u}.*

はい その 毛糸玉-対格/それ-対格

「うん、その毛糸玉(を) / それ(を)。」(西岡 2006 : 63-64) (改変)

(14)の B の発話中の *o(+Ø)* 型(B の発話中の *\*onu*)は、同一発話文脈において *o*+名詞型(B の発話中の *\*o yumağ-ı*)が許容されないことから、(省略に依存しない)名詞句照応形の *o* であることが分かる。一方 A の第 2 発話中の *o(+Ø)* 型(A の第 2 発話中の *onu*)は、同一発話文脈において *o*+名詞型(A の第 2 発話中の *o yumağ-ı*)が可能なることから省略用法の *o* であることが分かる。(14)における 2 種類の *o(+Ø)* 型の分布から我々は名詞句照応用法としての *o* の使用だけが発話現場における指示対象の不在と言う強い非現場性の制約を受けていることを明確に観察することができる。

それでは、*o(+Ø)* 型は何故名詞句照応形と省略形の場合でこのような分布の差があるのだろうか。まず省略を伴う場合の *o(+Ø)* 型から考えてみよう。我々は先に見た(7e)から、省略を伴う *bu(+Ø)* 型が指示対象が発話現場に存在する場合にしか用いられないことを知っている。又同時に(文脈指示用法の)*bu(+Ø)* 型が持つこうした非文脈指示型の(現場性)制約が *bu(+Ø)* 型が省略を伴っていると言う事実由来するものであると言うことを論じた。すなわち、同一の、又は類似の名詞の繰り返しをその定義要件の一部としている(非照応)文脈指示用法の指示

詞にとって、繰り返し名詞の省略は、文脈指示用法の指示詞としての定義要件の部分的欠落を意味し、それに応じて文脈指示用法の指示詞の(本来の)文脈指示性が部分的に後退し、結果として文脈指示的性格と非文脈指示的性格(現場性)を合わせもつ、中間的な指示詞として省略を伴う bu(+Ø)型を捉えることができるとする考え方である。

もし以上のような考え方が正しいならば、省略を伴う文脈指示用法の o(+Ø)型にも同様の理由でこうした意味での中間的性格が観察されるはずだが、実際には(10)、(11)の例に見られるように、文脈指示用法の o(+Ø)型の場合には、そのような非文脈指示型の現場性の制約は観察されない((10)では指示対象は指示現場に存在し、(11)では指示対象は指示現場には存在していない)。それでは同じように省略を伴っているのに、o(+Ø)型には現場性の制約が見られないのは何故だろうか。筆者は、この場合にも又(バルプナル 2014 で見た) bu と o が(非文脈用法指示詞として)持つそれぞれの直示性の強さの違いが問題を解決する鍵になるだろうと考える。前節で見た直示性の強い「話し手の空間」の指示詞 bu(+Ø)型の場合、義務的に指差しが必要となるために、指示対象が現場に存在することが指示行為の遂行上必然的に要請されることになる。一方本節で見ている文脈指示用法指示詞 o は、非文脈用法の指示詞としてはバルプナル(2014)で見たように非「話し手の空間」の指示詞であり、基本的に指差しを伴うことのできない直示性の極めて弱い指示詞である。言い換えるならば「指差し」と言う制約を持たない非「話し手の空間」の指示詞は、そもそも非文脈指示用法においてさえ指示対象の現場での存在性と言う制約を受ける必要のない指示詞であると言えるだろう。筆者はこのことが省略用法の文脈指示用法指示詞 o(+Ø)型が、(省略を伴い、従って定義により非文脈性を獲得しているにもかかわらず)指示対象の現場での存在/不在にかかわらず用いられる要因を形成しているのだと考えている。

このように考えた場合、バルプナル(2011、2012)において、(非照応)文脈指示用法として同列に扱ってきた同一(又は類似)名詞の繰り返しの場合(bu/o+名詞型の場合)と同一(又は類似)名詞の省略を伴う場合(bu/o(+Ø)型の場合)が、適切な指示詞使用のための現場性条件との関連においては、実は互いに異なる振舞いをしていることが分かる。同一の(又は類似の)名詞の繰り返しを伴う場合には、bu も o も、指示対象が発話現場に存在するか否か(i.e. 現場指示であるか否か)に拘らず、一律に「管理可能性」の条件に従うのに対して、同一の(又は類似の)名詞の省略を伴う場合には、「管理可能性」の条件に加えて、上で見たように指示対象が発話現場に存在するか否か(i.e. 現場指示が可能であるか否か)と言う現場性・直示性の条件にも従っている。こうした繰り返し用法と省略用法の間に見られる分布の差は、前述したように、後者における(省略が引き起こす)発話文脈の部分的消失とそれに伴う非文脈指示用法への部分的回帰に由来するものであると考えることができる。

最後に省略を伴わない o(+Ø)型(8)、(9)、(12)に見られる名詞句照応形としての o は、指示対象が発話現場に存在しない場合にだけその使用が容認されるという我々の観察(8)、(9)では名詞句照応形としての o が容認されるが、(12)では不可である)について考えてみよう。こうした名詞句照応形の持つ制約に見られる現場性との不適合性(incongruence)を「非直示性」制約と呼ぶならば、「非直示性」制約は、非文脈指示用法の指示詞に見られる「現場性・直示

性」の制約の対極にある条件であると考えることができる。このように考えた場合、我々は、指示詞 *o* の名詞句照応用法を現場性・直示性から最も遠く離れた指示詞用法として位置付けることができる。いまバルプナル(2011)で見た指示詞用法の区分けが与えられるならば、本節での観察は、先行発話文脈への依存度に基づいて非文脈指示用法と文脈指示用法を基準に配列された個々の指示詞用法の階層上に設定された(一定の)現場・直示性のスケールとして捉えることができ、与えられた現場・直示性スケールの最上部に位置するのが、非文脈指示用法の持つ導入用法であり、最下部に位置するのが名詞句照応用法であると考えることができる。指示詞用法の階層が定義により発話文脈への依存度によって構成されていることを考えるならば、発話文脈への依存度が最も高い名詞句照応用法が最も低い現場・直示性への依存度を持つことは、上で述べた現場・直示性のスケール(*deictic cline*)の帰結として位置付けることができるだろう。換言するならば、本稿が主張する先行発話文脈への依存度を基盤とする指示詞分類が、その帰結として現場・直示性に関するスケール(*deictic cline*)を形成することを考えるなら、本節で観察した名詞句照応用法に見られる「非直示性」制約は、名詞句照応用法に見られる高い先行発話文脈への依存度由来のものであると理解することができる。

## 5. まとめ

本稿では、バルプナル(2011)で十分に述べることができなかつた文脈指示用法の *bu/o* + 名詞型における名詞の省略可能性について論じた。その結果は以下の通りである。

3節では、文脈指示用法 *bu* + 名詞型とその省略形 *bu* (+ $\emptyset$ ) 型について検討した。その結果 (i) *bu* (+ $\emptyset$ ) 型は全て *bu* + 名詞型からの統語的削除(省略)によって派生され、従って *bu* (+ $\emptyset$ ) 型を省略を伴わない、独立した名詞句照応形として考えることはできないこと、(ii) *bu* (+ $\emptyset$ ) 型は指示対象が発話現場に存在するときだけに適切に用いられると言う点において、*bu* + 名詞型には見られない「現場性・直示性」の条件に従うことを述べた。更に、*bu* (+ $\emptyset$ ) 型の持つ(i)と(ii)の特性を、(a) 先行発話文脈への依存度に基づいて配列された指示詞用法の階層上に設定された現場・直示性のスケール、(b) 省略(統語的な削除)の持つ機能、(c) 非文脈指示特性の文脈指示への投影による帰結として理解できることを論じた。

続く第4節では、文脈指示用法 *o* + 名詞型と *o* (+ $\emptyset$ ) 型について検討した。その結果 (i) *o* (+ $\emptyset$ ) 型には *o* + 名詞型からの省略を伴わない、独立した名詞句照応形としての用法があること、(ii) 名詞句照応形としての *o* は強い「非直示性」の制約に従うこと、(iii) 一方 *o* + 名詞型からの省略によって派生されたと考えられる *o* (+ $\emptyset$ ) 型にはそのような「非直示性」の制約は観察されないことを述べた。更にこうした *o* (+ $\emptyset$ ) 型の持つ上記(i)、(ii)、(iii)の特性が、(*bu* (+ $\emptyset$ ) 型の場合と同様に)、(a) 先行発話文脈への依存度に基づいて配列された指示詞用法の階層上に設定された現場・直示性のスケール、(b) 省略(統語的削除)の持つ機能、(c) 非文脈指示用法の特性の文脈指示用法への投影に還元して考えることができることを論じた。

以上のように考えることによって、従来あまり述べられてこなかつた (i) 文脈指示用法の *bu/o* + 名詞型がどのような場合に *bu/o* (+ $\emptyset$ ) 型に省略可能であるか、(ii) *bu/o* (+ $\emptyset$ ) 型が全て *bu/o* + 名詞型の省略形であると考えられることができるか、(iii) *bu/o* (+ $\emptyset$ ) 型は、*bu/o* + 名詞型には

見られないどのような特性を持っているか、(iv) (iii)で見た bu / o(+Ø)型の特性が省略とどのような関連性を持っているか、等々の点に関して、(少なくとも現代トルコ語の指示詞用法に限っては)ある程度の原理的な説明を与えることが可能になったと考えている。

又、本稿での考察から、文脈指示用法における同一の、又は類似の名詞の繰り返し型と省略型は、(バルプナル 2011 で考えたような)同列の文脈指示用法現象とは考えることができないこと、むしろ純粋な非文脈指示用法と純粋な文脈指示用法の中間形態として位置付けられなくてはいけないことが分かった。

最後に、本稿での考察は先にバルプナル(2011)で見た「指示詞 o だけが名詞句照応形として用いられ、指示詞 bu は名詞句照応形としては用いられない」と言う主張を統語的削除の観点から裏付けるものとなっている。

## 謝辞

この原稿の完成に当たっては、匿名の査読者の方々及び編集委員の方々にコメントをいただきました。お礼を申し上げます。又、この場を借りて東京大学大学院人文社会系研究科の林徹先生に感謝の意を表したいと思います。先生には、博士前期課程の研究生の段階から現在に至るまで、言語の研究に関していつも励ましていただき、トルコ語指示詞の研究に関して数多くの貴重な助言とコメントをいただきました。先生に心より感謝を申し上げます。

## 参考文献

- 西岡いずみ(2006)『現代チュルク諸語の指示詞の研究』九州大学大学院平成17年度博士論文。
- 林徹(1989)「トルコ語のすすめ3-「これ・それ・あれ」あれこれ」『言語』18-1: 96-101.
- 林徹(2008)「トルコ語の指示詞şuの特徴」『東京大学言語学論集』27: 217-232.
- 林徹(2010)「指示詞の選択から見たイスタンブルとベルリンのトルコ語」『東京大学言語学論集』29: 17-28.
- バルプナル、メティン(2010)「現代トルコ語における“o”系列指示詞の特徴について-直示用法を中心に-」『東京大学言語学論集』30: 9-26.
- バルプナル、メティン(2011)「トルコ語指示詞の文脈指示用法について-文照応形としてのbu, oの用法-」『京都大学言語学研究』30: 71-105.
- バルプナル、メティン(2012)「トルコ語指示詞における非文脈指示用法と文脈指示用法について-文脈指示用法を中心に-」『アジア・アフリカ言語文化研究』83: 89-116.
- バルプナル、メティン(2014)「トルコ語指示詞における非文脈指示用法の再検討」『東京大学言語学論集』35: 21-39.
- Banguoğlu, Tahsin (2004) *Türkçe'nin Grameri*. Ankara: Türk Dil Kurumu.
- Ediskun, Haydar (1999) *Türk Dilbilgisi*. İstanbul: Remzi Kitabevi.
- Ergin, Muharrem (2002) *Türk Dil Bilgisi*. İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Yayınları.
- Gencan, Tahir Nejat (2001) *Dilbilgisi*. Ankara: Türk Dil Kurumu.
- Göksel, Aslı and Celia Kerslake (2005) *Turkish: A comprehensive grammar*. London/NewYork:

Routledge.

Hayasi, Tooru (2004) “Türkçe ve Japonca işaret sözcükleri üzerine bir deneme”. *Dilbilim Araştırmaları* 2004, Boğaziçi Üniversitesi Yayınevi, 51-62.

Kornfilt, Jaklin (1997) *Turkish*. London: Routledge.

Lewis, G. L. (1967) *Turkish grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Öğüt, T.Yılmaz (2004) *100 Diyalog*. İstanbul: Mitoş Boyut Yayınları.

# On the Possibility of Reducing the Noun

## in the Phrase *bu / o*+Noun:

### With Special Reference to Text-Dependent Usage

Metin BALPINAR

Keywords: Turkish, demonstratives, text-dependent usage, controllable domain, reduction possibility

#### Abstract

In this paper, focusing on the text-dependent usage of the Turkish demonstratives, we analyse the reduction (i.e. syntactic deletion) possibility of the noun in the “*bu / o*+noun” phrase, which has not been comprehensively discussed in Balpınar (2011). The following points are argued in this paper:

- (i) In the same linguistic text, the presence of a “*bu*+noun” phrase is a necessary condition for the occurrence of the “*bu*(+ $\emptyset$ )” phrase, and hence we can consider all usages of “*bu*(+ $\emptyset$ )” as reduced forms of “*bu*+noun”. In this sense, it is possible to assume that “*bu*(+ $\emptyset$ )” does not function as an NP anaphor, since the NP anaphor is not derived from “*bu*+noun” by means of reduction.
- (ii) The presence of “*bu*+noun” is not a sufficient condition for the occurrence of “*bu*(+ $\emptyset$ )”, because another condition must be realized for “*bu*+noun” to function as a sufficient condition of “*bu*(+ $\emptyset$ )”; i.e., the entity denoted by the noun of “*bu*+noun” must physically exist in the context of utterance.
- (iii) When the same text is given, the presence of “*o*+noun” does not constitute a necessary condition for the occurrence of “*o*(+ $\emptyset$ )”. It is thus entailed that there are “*o*(+ $\emptyset$ )” forms which cannot be derived from “*o*+noun” forms via reduction. Such usage of *o* can be characterized as NP anaphors mentioned in Balpınar (2011).
- (iv) The presence of “*o*+noun” is a sufficient condition for the occurrence of “*o*(+ $\emptyset$ )”, and hence we can consider that “*o*(+ $\emptyset$ )” undergoes reduction. Unlike *bu* in (ii), *o* of this category does not need physical existence of the referent in the context of utterance.
- (v) The properties (i)-(iv), identified in the text-dependent usage of “*bu / o*(+ $\emptyset$ )”, can be explained by (a) difference in the dependency on the preceding text (i.e. the loss of the preceding text triggered by deletion and the partial regression to the non-text-dependent characteristic), as well as (b) difference in the intensity of dependency on the deictic characteristics, which the non-text-dependent demonstratives exhibit.

(バルプナル・メティン・メフメット・アーキフ・エルソイ大学 助教授)